

## 『上方伝統芸能あんない』

堀口 初音／著 創元社（2011年）

伝統芸能と言っても、東京（江戸）と関西（上方）では違うところも多いとか。この本は京都出身の著者が、とてもわかり易く8つの上方伝統芸能を紹介しています。上方伝統芸能とはどんなものか、つまずきのポイント、チラシの読みかた、鑑賞のマナー、チケットの買い方…と初心者にはありがたいココロエが満載です。各演者のインタビューを読めば、より身近に伝統芸能を感じることができそう。着物で観劇の際のコーディネート見本つき。

## 『使ってみいたい落語のことば』

長井 好弘／作 中央公論社（2010年）

「痛快なことば」「愛嬌のあることば」「粋なことば」「すつとぼけたことば」「色っぽいことば」「不思議なことば」の六章にわけて書かれています。落語の<sup>はなし</sup>で使われている色々な表現をテンポよく読むことができます。「あたりめあだ。こちとら江戸っ子だい、職人だい、威勢がいいんだ俺ア！」など聞いたことのある言葉がいくつもでてくるかもしれません。

お気に入りの言葉を見つけて、江戸っ子気分を味わってみませんか。

## 『花の道は嵐の道 ～タマの猫又相談所～』

天野 頌子／著 ポプラ社（2009年）

気弱な男子高校生、草薙理生は“風月流の家元の孫”というだけで、反論する間もなく花道部に入部することになる。眉目秀麗な瀬川と真面目な野心家工藤も加わり、貧乏花道部の新入生トリオは、日々花材集めに奔走する。そして次第に花道部と茶道部の因縁の対決に巻き込まれていく。そんな理生が頼りにするのは、猫又のタマ。猫又特有の猫ひげレーダーで危険を察知し、猫のネットワークで見事花道部の危機を救う…のか!?



## 『こども伝統芸能シリーズ1 歌舞伎』

市川染五郎私がお案内します』

市川 染五郎／監修  
アリス館（2011年）

歌舞伎を見たことがありますか？敷居が高そうだと思いませんか？そんなことはありません。歌舞伎は400年をこえる日本独特の芸能ですが、言葉や時代背景、ルーツがわからなくても、奇想天外のストーリー、ゴージャスな衣装、大立回りなど、どれかひとつは自分の感性に引っかかるものがあるはずですよ。

お客さんを喜ばせることを徹底している歌舞伎の世界をのぞいてみませんか。



## 『仏果を得ず』

三浦 しをん／著 双葉社（2007年）

「おまはん、六月から<sup>といちろう</sup>兎一郎と組みい」と<sup>たける</sup>健が師匠に言われたのは、春もまだ浅いころだった。兎一郎の評判は、「実力はあるが変人」である。ただでさえ繊細な俺の神経がすり減る、と健は異議を申立てたが聞き入れてもらえず、大阪公演から組むことに。

単純でまっすぐな性格の大夫の健と偏屈者の三味線弾き兎一郎の凸凹コンビをとりまく、個性豊かなキャラクターたちに心が躍ります。文楽の世界にふれてみたくなると思います。

## 『三毛猫ホームズの文楽夜噺』

赤川 次郎／作 桐竹 勘十郎／監修  
角川書店（2010年）

江戸時代から続く文楽は、物語を語る「大夫」・音を<sup>奏</sup>でる「三味線弾き」・人形を操る「人形遣い」とで、ひとつの舞台をつくりあげます。文楽はかつて「見に行くもの」ではなく「聞かせるもの」であり、花形は<sup>ぎだゆう</sup>義太夫だったそうです。

作家赤川次郎さんが人形遣いの桐竹勘十郎さん達と対談して、文楽の魅力をあつく語っています。